

後藤本『老の寐言』とその言語

A Report on *Oino-Negoto* Owned by Goto Library and It's a Literary Style

山 本 淳

Jun Yamamoto

要旨：山形大学附属博物館後藤文庫が持つ、近世村山地方の郷土本『老の寐言』を国語学的に検討した。文章語体を旨として書かれながらも、聞き手を意識した箇所での断定辞ジャの使用、あるいは助辞二の脱落や助辞イの使用が観察され、音韻面でも促音や撥音の使用といった口頭語性が諸処に発現している。さらに連接母音ことai・oiにおけるイからエへの交替、チからツへの交替、カタ行有声化などの方言的事象も色濃く観察され、さらに同系統の江口本では、音韻現象において後藤本とは異なる現れ方をしていることが判った。

キーワード：近世村山地方郷土本、口頭語性、音韻表記、村山方言資料

はじめに

『老の寐言』と称する近世村山地方郷土資料の存在については、つとに後藤嘉一が『山形市史』中巻ならびに『山形市史編纂資料』第3集およびに詳しく報じている。『山形市史』においては高島米吉所蔵および江口文四郎所蔵のもの2本について解題がなされ、また『山形市史編纂資料』にはそれぞれ全文が掲載されている。さらにこれに次いで、後藤利雄（山形大学人文学部名誉教授）の発見した同題の写本が紹介され、『山形方言』10に全文が掲載されている。このほか横尾新所蔵の写本があると言われ（後藤・阿部1972）、これまでに都合4本の写本が知られている。小考では、現在その存在が確定的な写本の後藤本『老の寐言』を採り上げ、書誌を明示し、その内容を国語学的に検討したい。

先行研究に松岡（2003）が挙げられるが、やはり後藤本を対象として採り上げている。同研究では、『老の寐言』の中から78語を採取し、当該語について村山地方に住む中高年層を対象にアンケート調査を行っている。それらの語が使用語彙であるのか理解語彙にとどまるのか、また意味不明となっているか語彙分類別に整理し、残存率を計測したうえで方言の残存と崩壊について考察した研究論文である。ただし考察の対象が方言語彙に限定されており、あくまでも現方言との比較資料として同書を探り上げるにとどまっている憾みもあり、音韻・語法面にわたり同時代の方言資料としての価値を再検討するという課題が残されているように思われる。うえが愚考を弄ずる所以である。

1 『老の寐言』について

同写本は、現在山形大学附属博物館所蔵と確認される（後藤文庫08-81）。江戸後期の写本ではないかと考えられており、1巻1冊墨付51丁、27.2×16.4（タテ×ヨコ）の袋綴中本である。半丁につき原則的に10行、1行につき25字程度で書かれている。同本の含む喩の題目を順に挙げれば以下の通りである。（ ）は所在丁数を表す。便宜上出現順に番号を頭

に振っておく。

- 01 序 (1才~1ウ)
- 02 にくまれ草 (2才~12ウ)
- 03 風流新板 臍の一儀 [「風流新板」は右寄せ小字] (12ウ~15才)
- 04 捨犬の辨 (15才~16才)
- 05 五詔先生述 風流臍おどり談義 [「五詔先生述」は右寄せ小字] (16才~24才)
- 06 手拭ふんどし 味噌あげ論 [「手拭ふんどし」は角書] (24ウ~28ウ)
- 07 大淀八か伝 (29才~29ウ)
- 08 病神御託宣の哥 (30才)
- 09 かなおろしの讚 (30才)
- 10 酌子の銘 (30ウ)
- 11 菟蓐の賦 (31才~31ウ)
- 12 はやり綿ぼうし鶴の真似鷹 (32才~34ウ)
- 13 最上チャの辨 (34ウ~35ウ)
- 14 無縁大豆 (35ウ~36才)
- 15 團扇の讚 (36ウ)
- 16 長崎亀か伝 (36ウ~37ウ)
- 17 訪芝居跡賦 (37ウ~38ウ)
- 18 虱一代記 (38ウ~40ウ)
- 19 葎庵冬籠 (40ウ)
- 20 敬申不自由文之事 (41才~41ウ)
- 21 しなび巾着二度の出世 (42才~46才)
- 22 袋の論 (46才~48才)
- 23 浮木の亀 (48ウ~51ウ)

後藤・阿部によれば、明治四年「空針」と称する人物による編集とされる高島本は面白可笑しく手を加えた形跡があり、明らかに明治四年の作と分かる作品が折り込まれているという。またうえ02の「にくまれ草」は、いずれの写本にも共通して含まれる文章ながら、ひとり高島本は「にくまれ草」以外独自の内容を持っていることから、一部を改作し明治初年に新規の内容を含んで成ったのが高島本であると見なされている。

他方、末尾に「天明八申正月」日付入りの横尾本と、表紙に「安政四巳年」とある江口本とは内容的にもほぼ共通しており、両者の書写年代から、オリジナルの『老の寐言』は少なくとも天明年間までには成立していたと考えられ、さらに江口本はこの本文系統に属するものであるとの見方が示されている。件の後藤本は、嚙の共通性から横尾本に近く、おそらく同系統のものと判断されるという^[註1]。

さて、横尾本系統との判断があるからには、当然江口本との共通性も問題になる。江口本は全文が掲載されており、容易に比較することができる。江口本の嚙の題目を挙げてみると、

- 自序 (後藤本では01「序」に対応)
- 老の寝言 (後藤本では02「にくまれ草」に対応)
- 虱一代 (後藤本では18「虱一代記」に対応)
- 袋の論 (後藤本では22「袋の論」に対応)
- 臍の一義 (後藤本では03「風流新板 臍の一儀」に対応)
- 味噌上ヶ論 (後藤本では06「手拭ふんどし 味噌あげ論」に対応)
- 扶疎巾着二度の出世 (後藤本では21「しなび巾着二度の出世」に対応)

となり、すべて同内容の嘶は後藤本にも存する。また後藤本は江口本にない嘶を相当数含み持つ。後藤本「にくまれ草」は、江口本において書名に同じく「老の寐言」とある嘶に対応するが、同系統の本文であることを前提にすれば、「にくまれ草」を基にして加筆・削除の過程を経ていると推定される。増補の仕方について見れば、江口本においては少なく、後藤本においては多くなされてきたことが一目して明らかである。大胆な推測が許されるならば、おそらくオリジナルの『老の寐言』は後藤本でいえば「にくまれ草」（江口本では「老の寐言」）であり、これに増補がなされてきたように見受けられる。

後藤・阿部（1972）の言説では、20「敬申不自由文之事」の嘶の中に、

幸いナルカナ 今月今日壬午ノトシ越シノ砌ヲ待テ（41ウ⑤）

とある一節の「壬午」について、

それが著作年号かあるいは書写年号であると思えば、さし当たって寛政四年（1792年）—天明八年の四年後—が考えられる（「壬子」と読めば文政五年—1822年—になる）

（14頁上段、西暦は算用数字に直して示した）

と述べ、後藤本の成立年代を推定している。この嘶はひとり後藤本にのみ存するものと思われるところから、少なくともこの「壬午ノトシ」以降に後藤本が成ったと考えられよう。このほかに、後藤本成立時の手がかりは同書中にある。

さらに、13「最上チャの辨」については、横尾本の目録にはないと報ずる。つまり後藤本に新たに加えられた嘶ということである。この「最上」は『老の寐言』の成立背景にある村山郡も含む地域であることも後藤・阿部により説明される。この村山郡の農村地帯に居住した「五訛先生」およびその門人の合作が同書ではないかと指摘する。理由として、

○一連の写本の発見された場所が山形であること

○言葉遣いが村山弁に近いと考えられること

○13「最上チャの辨」の項目があってそれは村山地方を指すと考えられること

○05「五訛先生述 風流臍おどり談義」とあり「先生」とあるからには「五訛先生」創案であって門人による加筆の可能性も考えられること

○05「五訛先生述 風流臍おどり談義」の嘶に「山形の鳥は……（23オ①）」「山形と云ハ出羽山形ノ……（23ウ④）」「爰らの鳥と八田の草鳥とてよこれ百姓の事じや（23ウ⑦）」とあり山形の農村地帯が背景にあること

などを挙げている。一覧しても諸処に俚言性を帯びた文章であることが知れ、国語学的に見ても一定の方言資料的価値を有することが期待される。

2 『老の寐言』の表記・文体

近世後期の談義体の文章である。内容的にも談義本に作った風合いがあり、全体として説教口調である。事物を擬人化してとりとめない嘶に仕立てるといった、近世小咄本にも似た諧謔的内容を持つものの中にはあるが、総じて寓意的である。

仮名表記としての規範性についてまず見てみると、濁音で読むべきところに濁点が振られている箇所もあればそうではないところもあって、濁音表記に関しては恣意的である。基本的に漢字かな交じり体である。しかしながら、耳で聞いたままに書き留められたと思いき決まり文句、囃子詞、オノマトペなどについて、今日的には片カナと理解される表記がなされているものもある。用例を以下に示す（便宜上私意に句読点を補うこととする）。

年寄も若イも男も女も、ウコメクムコメクカマキウインに至る迄、（2オ⑤）

時てないもないにテンツクテン、何となされて、（8ウ⑧）

今十七八は仲人か入らぬと、ノンヤレノウ。（11オ⑦）

熊野山の飛脚をなふつてハカア／＼とも泣せず、八幡宮のつかひヲせひてハテテツホホとも言せず、(16オ③)

閻魔大王も獄卒共もトントモウ手にあまし、(17オ⑦)

アノ蜂の内にジカ蜂と言蜂ば榮虫ヲくわい来てジカ／＼と云。(23オ①)

「い・ひ」「う・ふ」「え・へ」「う・む」の仮名は通用しており、また「は・わ」の通用も認められるが、以下の例では、濁音がなであって然るべき「は」の代わりに「わ」が用いられている。

ソリヤ御出遊わした、と亭主大キに悦び、(49オ⑧)

「ぢ・じ」もおおよそ当代の仮名遣いの通則に副うような遣い方ではある。そうした中で、

よき大工は、ふし木曲り木もすてつにつかふと承に、(14オ⑤)

のように、「ず」とあるべきところを「つ」で表記している点、四つかなの区別には一部乱れが見られる。開合の別に関しては、伝統的なあり方を守っているところと、

そうてハなくて(11ウ①)

今日ハ地獄のさたを説て御聞カせましやう。(16ウ④)

のように、混同する例も見られる。

文末表現について見ると、ジャ・ナリ体の混交であることが以下の例から知られる。

鳩ハ大豆を喰道理、磁石ハ鉄を吸ふの利屈をもつてまじなふたものじや。然バ今此先生もかんの虫取に漆やノデなどをヤレおれもさゝれたと言程に八と云も尤なり。(29ウ) おおむねナリ体で書き進められているが、ジャの現れる箇所を見ると、説教臭ある談義体で語られる傾向の強い「にくまれ草」「風流躰おどり談義」に集中して現れており^[註2]、聞き手を意識した文調に現れやすい傾向が看取される。

夫レじやによりて今言通り親は苦をスる、子ハすり、孫はぜひ共乞食すると云者じや。

(9オ①)

其時ハ組頭印形を遊行上人の御血脈よりありかたいとおもふていたゝくじや。なんとばあ様達コワイコトテハナイカ。(19オ④)

トントモウ此極楽へ参らるゝ事じや。しかればばあ様達もよく聞いて後生を大事につとめ臨終正念に年をとらしやれカイ／＼／＼／＼。(21ウ⑦)

このほかにも、文末にいわゆる文章語体と口頭語体との両形が観察される。

心の花の咲かぬと云事なし。(4ウ⑤)

案して見れば世の中二下かちてよいものはころばし人形より外はない。(12オ①)

遠りよもへちまもあらバこそめつぼう弥八とゴタク切たり。(12ウ⑤)

夫レじやによつて青砥殿は多ク入用をいとわず三文の銭を取返された。(5オ⑩)

文末表現のほかにも、話し言葉の特徴を具えた箇所も散見される。一例を挙げると、

其の次のらつかは娘達口云ましやう(10ウ⑤) [口は当該箇所にも何も示す] など、同箇所を江口本で見れば、

扱其次のラッカは娘達へ申ませう(103頁上⑧)

となっており、行為の対象(受手)を表す助辞へ、もしくは、二の格標示が行われていない。いわゆる二脱けの現象で挙げれば、次の例も該当する。

唐の伯夷と云人は九歳にして初てはやく転士[博士]の位口至ル。(11オ⑨)

また文章語にはまず現れない助辞イの使用も認められる。

罪をほろぼしニ夕度ヒしやばいかいり人になるべし。(18ウ⑤)

和尚様い御尋申度イ事が御座ります。(24オ②)

なんてもおなまに聞すハなるまいと思ふて居た所い幸イ門口から、(49オ⑥)

其所イ来かゝり、(50ウ⑥)

助辞イについては、助辞へからの転として、室町時代の抄物類や書状の例を引く『時代別国語大事典 室町時代編』に説明がある。一方で近世南奥羽地方の文献に記録されたイを報ずる彦坂(2004)では、助辞二の発音上の緩みによるもの、母音エの狭さに起因して助辞へから転じたものと、それぞれ出自を異にすると考えられる助辞イの混在の事例が指摘される。ただいずれにしても、実際の話し言葉の反映という点において助辞イの出現は一致しており、小考に提示した例も、口頭語的表現におけるイの現れと考えたい。

このほか東部方言の音韻的特徴と知られる撥音・促音使用が認められ、口頭語性を強めている。例を順に挙げる。

ひんまきて (1オ⑨)・ふつかけ硯 (1ウ③)・すつ切レ筆 (1ウ③)・おつとつて (3ウ③)・

つっぱなし (4オ⑦)・ひつたくり (6オ③)・ブツクレ鍋 (11ウ⑥)・よつくきけ (27ウ⑩)

最後の例は、形容詞原形に促音添加したものであって、他の複合動詞前項の音が撥音・促音化した例とは質的な差異があることに心致すべきではあるが、いずれも口頭語的である点において共通性が認められる。

以上のような特徴を具えている一因として考えられることに、同書が談話の手控えとして書き留められたということが挙げられるように思われる。その序文に、

諷は知らず、儀大夫は覚えす、そこの日待かしこの祝座につらなつても片すみに打かゞミて居れば、ちつと親父も咄しても仕やれ／＼とすゝめらるれと、其はなしか又第一赤下手なれハ唯ゆびをくわい汗を流し居るも扱はや本意なけれハ、与レ風おもひつきし妄想をはな紙のはしに書つけ置キ、それをよみて時の一興とし、衆人の眠気を醒させし反故一つかねありしを、(1ウ)

とあり、座興の一助として平素より心に留めた喃を書き付けておいたものであり、創作や見聞による喃が収集されて成ったと考えられる資料である。口頭語性が諸処に現れるのもそのためではなかろうかと理解される。

3 後藤本における音韻上注意すべき表記

次に、音韻上に注意すべき表記がある。以下にまとめて用例を示すが、出現順に掲げるものとし、同語例は当該例に続けて所在箇所のみ記すことにしたい。[]に意味を、()に所在箇所を、【 】はルビ付きの場合のカナをそれぞれ表したものである。

I 母音交替エ>イ

(ae→ai)

[1]ゆびをくわい (1オ④)

[2]是をあたい侍る (1オ⑨、ほか4ウ④・7オ⑩・7ウ⑤)

[3]下拵イ (3オ①)

[4]七文にひかひても (4ウ④)

[5]子共サイあらば (5ウ③、ほか6オ②・7ウ①・9ウ④・10オ①・10ウ⑦・25オ⑨・25ウ⑥・26オ①・27オ①・27ウ⑤・33ウ②・38ウ①・42ウ⑦・50ウ②)

[6]御迎イ (5ウ⑦)

[7]左まい (6ウ③、ほか6ウ⑧・42オ⑩)

[8]身上拵イる (8オ⑧)

[9]廿四孝を引かい [引き替え] て (9オ⑨)

[10]につことわらひハ (11オ⑤)

[11]かいつて (11ウ③・17オ⑤)

- [12]南無阿弥陀佛をとないても (14ウ⑨、ほか23オ⑩)
- [13]身命っかいて (15ウ⑤)
- [14]しやばいかいり [娑婆に帰] (18ウ⑤)
- [15]しかり給ひハ (18ウ⑧、ほか27ウ⑥・33オ⑥)
- [16]荣虫っくわい来て (23オ①)
- [17]引つかまいて (23ウ⑥)
- [18]不調法もかいり見す (25オ⑩)
- [19]上にくわいす (26ウ④)
- [20]二君につかいす (27オ⑥)
- [21]こたいける (27ウ⑧)
- [22]取あいす (28ウ②)
- [23]たつさいて (33オ⑦、ほか42オ④)
- [24]腹筋っかかいて (34ウ⑧、ほか39ウ⑩)
- [25]分別袋を仕かい (48オ③)

〈ie→ii〉

- [1]見いる (11オ②、ほか22オ③⑥・22ウ④・24オ②・28ウ①・49オ④)
- [2]……といひとも (14オ⑩・15ウ⑨⑩・34オ①)
- [3]臍のにいたる [煮えたる] (14ウ⑩)
- [4]此法名をおしい [教え] 給ふか (46オ①)

〈ue→ui〉

- [1]身の上い (2オ④、ほか4オ④・26オ⑤)
- [2]何ゆい (6ウ①、ほか30ウ⑩・49ウ⑤)
- [3]ふるひ／＼ [震え] (18ウ⑨、ほか20ウ⑨⑩)
- [4]むりに喰い [喰え] (24オ⑦)

〈oe→oi〉

- [1]序詞を添いよ (1ウ②)
- [2]おもひハ [思えば] (3オ⑩、ほか9オ⑥・42ウ⑨・47ウ⑧)
- [3]コい塚 [肥塚] (8ウ⑥)
- [4]覚いて (8ウ⑦、ほか16ウ⑩)
- [5]おとろひ給事 (10オ⑦)
- [6]たとひて (10ウ②、ほか29ウ⑥)
- [7]ひとひに [偏に] (19オ⑩)
- [8]ひとひもの [単衣もの] (21オ①)
- [9]調いて (33オ②)
- [10]匂ひども (37オ②)

II 母音交替イ>エ

〈ai→ae〉

- 御袋にねたれては (10ウ⑨)
- 我に向へて (26オ②)

〈ii→ie〉

該当例なし

〈ui→ue〉

該当例なし

〈oi→oe〉

屋敷添へ (19オ①)

Ⅲ 母音交替イ>ウ

〈tʃi→tsu〉

うつまた (26ウ⑨・27オ⑤・28ウ⑧)

Ⅳ カタ行有声化

〈k→g〉

[1]長いものにはまがれて (3ウ⑥)

[2]にほひをはごぶ (13オ⑧)

[3]万日の糸がう [廻向] 袋 (47ウ⑥)

[4]おながままでも (50オ⑤)^[註3]

〈t→d〉

五分にみだず[満たず](13ウ④)

Ⅴ 合拗音・直音

〈kwa・gwaの保持〉

[1]奇怪【クワイ】なり (15オ⑩)

[2]くわら [掛絡] の根付 (22オ⑥、ほか42ウ②⑦・46オ③)^[註4]

[3]因果【クワ】(26ウ⑩)

[4]八ぐわん [八願] (44オ⑧)

〈kwa→ka〉

千手かんおん [千手観音] (39オ⑦)

以上、Ⅰ～Ⅳのごとき方言音の現れと見られる特異な表記が認められる。

Ⅰ・Ⅱはともに、村山地方を含む山形県内陸地方において、イが平唇中舌、エが標準音よりも狭口で発音されるため、両者の区別が曖昧化するという当該地域の発音上の事由が関与した表記ではないかと思われる。単独母音の場合は比較的区別を保つが、こと語末については区別に混乱を来しやすくと指摘される(遠藤1997)ように、すべて母音が接続する例において表記上イとエとの交替が起きている。それもイ>エにおけるよりもエ>イにおける例の方が多く、とくに〈ae→ai〉〈oe→oi〉の交替が目立っている。エが狭口であることからイの近似音となっている事情が背景にあって、エ>イの交替例が現れていると考えられるが、〈ae→ai〉にこと多く現れている理由は定かではない^[註5]。

次にⅢについて見る。当該地域のウは標準音より前寄りに発せられ、平唇中舌音となり、イに近似した音として実現することが知られている(遠藤1997)。とくに子音[t][d][s][dz]が関係する場合において、母音イウの紛れが生じやすい。やはりこの例においても、チツの紛れが表記上に現れたものと考えてよいと思われる。

Ⅳについて、当該地域の子音の特徴の一つに、語中・語末のカタ行音有声化との関わりが挙げられる。有声音に挟まれた[k][t]は有声音として発せられるが、それが文字化された場合、ガ行ダ行の濁音仮名で表記されるということであろう。同書にはさほど多くはないが、ガ行に表記された例が4例、ダ行に表記された例が1例、それぞれ認められた。

Ⅴの合拗音・直音に関してはうえのⅠ～Ⅳとは質を異にしており、単純に方言音と現れという捉え方はできない。伝統的に見て中央語に定着した合拗音kwa・gwaが、①音節としての不安定さ、②日本語全体的な傾向として唇音が退化の方向に働いてきたこと、③新仮名遣い制定による正書法の裏付けを失ったこと、などの理由を背景にして、衰退の一途を辿ったという日本語音韻史の事情がある。地方語においては、また中央語の事情とは異なっており、

中央語に根付いた合拗音の残滓が地方語に在って、それが地方においても徐々に衰退していったのか、もとより地方には根付かなかったのか、詳らかではない(加藤1975・徳川1979)。

まず事実を指摘すれば、明治38(1905)年『音韻調査報告書』の記述から、明治後年には、村山地方を中心とする山形県内陸地方において、合拗音とカ行直音との区別はなかったことが知れる(22條および23條)。すなわち「火事・喧嘩・銀貨・会・観音」「絵画・外国・本願・正月」の合拗音に係る部分はすべて「カ・ガ」と発音されているという。一方、中央語こと江戸語において、有識者層における合拗音保持の例は確実であったとされ(神戸1990)、下層に位置するほど乱れ、また時代が降るとともに直音化が進んだと見られる。

通常、「くわ・ぐわ」との表記がなされているからといって、文字通りの発音が行われていたと速断してはならず、伝統的な仮名遣いと実際の発音との乖離状態を考慮する必要がある。地方人に関しては、合拗音保持に関する判断が難しいが、[1][3]は後藤本書写者によるルビに残された表記である。少なくとも特定の語における合拗音に対しては意識的であったと、いちおうの判断はできよう。これとは別に、即音的に表記されたいI~IVの例を同書は具えており、話し言葉に即した表記が採られているという事実がある。さらに同書は、祝座での遊興に備えて控えておいた断を元手にして成立した書である(序文)。このことを十分に考慮すれば、たとえ一部「観音」を「かんおん」と直音に表記する例を含んでいても、特定の字音について文字を知る一部の層においては、地方人の間にも合拗音が保持されていたのではないかと^[註6]との見方も成り立つと考えられる。傍例として、近世庄内方言および有識者層における合拗音の実態を示唆する、氏家剛太夫『庄内方言攷』の記述が参考になる。

方言にユの音無きが如く、江戸音にクワの音無し。クワと唱ふる分は皆カと唱ふるなり。又サの音をシャと唱ふる事多し。これ江戸の人も謡などよくうたふ人には決して無し。藩の五十嵐又平は江戸生れにて謡を善くする人なり。廻国【クハイコク】の僧にて候、観音【クワンヤン】薩埵などうたへ共、カイコク カンノンとは言はず。されば是も方言ユの如くにて、江戸にても心ある人は、本音に唱ふと見えたり。されど怪むべきは渡邊伯秀の話に江戸の子供は句読を授くるに、関々雉鳩を幾度教へてもクワン／＼タルとは言ひ得ず、カン／＼タルシヨキウとばかり言ふには困りたりと語れり。

(三矢重松『庄内語及語釈』刀江書院・1930、75頁)

4 注意すべき表記(江口本と比較して)

前節に見たとおり、音韻上注意すべき表記に関して、同系統の本文と考えられている写本江口本の表記と見比べてみたい。写本の所在確認ができない現在、後藤嘉一による翻刻本文(『山形市史編集資料』3集所収)を使用するほか術がない。「凡例」によると、

- 一、できるだけ原文のままとしたが句読点は解説者がつけた。
- 二、読みにくい文字にはカナをつけた。
- 三、明らかな誤字と認められるものは、そのわきに()を付して本字を入れた。
- 四、送り仮名が無くて読み誤りそうなところは、その文字の下に()を付して入れたカナで書いてしかもカナ違いのあるものにも()を付してその下に漢字を入れておいた。

とあり、原文に忠実に翻刻しようとした態度が見られ、使用に耐える資料と思われる。

第一節に、江口本と共通する断を挙げたが、自序および共通する6つの断に限定して、後藤本における音韻上の注意すべき表記例をまとめて以下の付表に示す。

後藤本・江口本		後藤本		江口本	
		のべ用例数	異なり語数	のべ用例数	異なり語数
母音交替 エ→イ	ae→ai	36例	21語	18例	10語
	ai→ae	1例	1語	9例	8語
	ie→ii	5例	4語		
	ii→ie			1例	1語
	ue→ui	4例	2語		
	ui→ue	1例	1語		
	oe→oi	9例	6語	8例	5語
	oi→oe			3例	3語
母音交替 イ→ウ	tʃi→tsu	3例	1語	2例	2語
	ʃi→su			1例	1語
	ʒi→zu			4例	4語
子音の 有声化	k→g	2例	2語		
	t→d	1例	1語		
合拗音	kwa	4例	2語		
	gwa	1例	1語		

前節においてIおよびIIで挙げた項目は、たとえば〈ae→ai〉と〈ai→ae〉と変化の方向性が互いに逆なもの同士を対にして示す。また、I II IIIにおいて後藤本には見られなかった音韻現象、すなわち〈ii→ie〉〈oi→oe〉〈ʃi→su〉〈ʒi→zu〉がその例に相当するが、これらがこの付表に加わることとなる。このほか、後藤本に見られたIV・Vの項目は、江口本において確認されなかった。

江口本においても〈ae→ai〉〈oe→oi〉の例が多いが、後藤本に比べては逆方向〈ai→ae〉〈oi→oe〉の例も相当数見いだせることが指摘できよう。さらに後藤本にはなかった〈ii→ie〉の例が1例ながらあることを併せて考えれば、後藤本と異なり、江口本においては母音交替イ>エの傾向も決してなくはないのである。換言すれば、母音交替エ・イに関して、後藤本はエからイへの合一が目立ち、江口本ではエとイと両者区別の相互交錯が母音接続において認められるということになろう。

母音交替イ>ウに関しては江口本の方にそのバリエーションの豊かさが見られるものの、また他方で子音の有声化や合拗音表記が見られないだけに、各種音韻現象の観点からすれば、江口本は後藤本に比べて方言色の減退があるとも言うる。

同内容を含む写本二種に、以上のような明確な違いが認められることには、それぞれの写本の成立年代や書写者の意識の違いが関与していそうである。同系統の本文ではないかと目されながらも、実際に内部の言語を検討してゆくと様々な違いがあり、こと母音交替エ・イに関して全く異なる現れ方をしていることに注意がなされるべきであろう。

5 その他 語法および語彙

その他同書において注目される語法および語彙について、用例とともに指摘しておきたい。

A 佛の法に心を寄たらよかりそうなものに、(6ウ⑧)

形容詞カリ活用語尾にソウナが接続する例として挙げた。湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』(1981・風間書房)によれば、様態を表す助辞ソウナが形容詞につく場合、基本的には語幹に直接するという、抄物中の例を引いての記述があり、その直後に、

語幹の一音なる形容詞は、右最後の二例のごとく〔山本註：「無さうな」「善さうな」〕、原則通りに現れることもあるが、また左例の示す如く、その間に「サ」を入れることがある。

○花タチ花テハナササウナソ (四海 [山本註:『四河入海』の略称]、10-3、16ウ)

○得ノ字ヲ以テ見レハ一義カヨササウナソ (同、11-4、31ウ)

これを「無カリサウ」「善カリサウ」などは、言わぬ様である。(368頁)

と説明する。また対象とする時代を降って、『徳川時代言語の研究』(1955・風間書房)においても、形容詞語幹が一音節の形容詞には間にサが入ることが述べられ、「なささうな」「よささうな」のような近松物の例が紹介されている。つまり、前代および近世前期上方語において、現代語に等しい「よささうな」がすでに行われており^[註7]、「よかりさうな」は標準的な物言いとは言えなかったようである。

B 心がふてゝ仕業もシバこそ、(4オ③)

サ変動詞の未然形に口頭語形の「し」が認められる。このほかにも、

中々合点はしまい。(2ウ③)

のように、同じく未然形の「し」に推量辞のマイが承接する例が見られる。マイの接続に関しては、大正6(1917)年『口語法別記』において、

サ行変格活用の「しまい」を「すまい」又わ「するまい」せまい」「しよまい」などゝも云つて、全国、各地の混用わ、実に甚しく、区別することが出来ぬ、(254頁)

と述べ、「古格に従て、サ行変格活用の終止形「す」に附く」ことを正格としている。一方『口語法調査報告書』34條における山形県内陸地方では、山形市「すまい」、米沢市・南村山郡・置賜郡(東西南とも)「しまい」、北村山郡「すんまい」、最上郡「せまい」、西村山郡「スマエ・スルマエ・スンマエ」と用いられている旨が報告されている。置賜郡寄りに位置する南村山郡における「しまい」の使用に目が注がれるところである。

C 後生ノ一大事デモ心がケベき筈じやに、(5ウ⑨)

ベシは、終止形接続を正格としつつも、「見べし」のように一段動詞未然連用形にも接続する例を古く持っていたことは周知の事実であろう。湯沢幸吉郎(1981)における説明には、抄物の時代はむしろ「見べし」「着べし」のように、一段動詞にベシが接続する場合はイ・エ段音から続くことが多くなってきていることが述べられている(209頁)。また『口語法別記』にも、平安朝からそうした例が見られることや鎌倉・室町時代の諸文献にも散見される例が示されている(301~2頁)。こうした接続法を継承しているのか、このほかにも、

なんぞ非義をうらやみ非道の金銭を目に懸ケへきや(46ウ⑨)

のような例が本書において見られる^[註8]。またベシの後身であるベイに続く場合、

石佛の尻がくされベイか、鹿嶋の要石がぬけベイか、(35オ⑤)

から天ぢくでハほめべいとおもふかどうだんべい。(36オ⑦)

のような接続形が見られる^[註9]。口頭語ベイの例は、いずれも「最上チャの辨」において、同地域の特徴的言い回しベイチャの説明において引かれる用例に出てくるのであり、見方によれば「心がけべき」「懸けべき」はこうした口頭語におけるベイ接続の支えあつてのこととも解しうる。

D 虫喰齒じやト言紛らし、(6ウ⑩)

使役辞の活用形に揺れが見られる。うへの例のほかには、

釜なべの湯もぬるくわかせ、(2ウ⑩)

おほけの下タのホマチ金迄ほろき出させ、親父たましてハモイタ小豆壺俵ころはさせる。

(10ウ⑩)

とあつて、古格の表現を守っている。ただし後の1例は、末尾が「転ばせる」のように「せる」ではなく「させる」となっている点は別の注意が要る。

『口語法別記』によれば、奥羽地方は「読ませ・立てさせ」を用いる旨が記されており、

九州地方を除く東海北陸地方から西は、「読ませ・立てさせ」を用いる地域と「読まし・立てさし」を用いる地域と混在して複雑であると説明される（218頁）。また関東でも「読まし・立てさし」を用いることもあるが、「せ」と言う方がよいとしている。

E 祖父祖母か居てあつた。夫れから又息子姫が居てあつた。(16ウ⑤)

テアル・テアッタはアスペクトを担う中世の中枢的な表現形式であり、抄物類にも用例が比較的容易に拾い出せるようである。これが動詞「居る」に接続した形に見受けるが、追野（1996）にはこの表現に関して次のような指摘がある。

『表現法の全国的調査研究』35図「親しい友人の家をたずねて、入口で〈〇〇さんいるか〉と言うとき、どのように言いますか」という言語地図を見ると、中部地方以東の東日本に広く「イタッタ」「イテアッタ」という地域が広がっている。34図によると、「居た」という過去の表現には、ほぼ同一地域で「イタッタ」「イテアッタ」というようである。[1978年度科学研究費成果報告書『表現法の全国的調査研究』は未見]

つまるところ東部方言的な「イテアッタ」との関連性が見て取れるが、現在山形県内陸方言においては、已然態（居た）・進行態（居る）とも「イダ」と言い、米沢方言において稀ながら回想の用法に「タッタ」が、

キンナワ ウジサ エダッタゲンドモ……（昨日は家にいたのだけれども）

のごとく使われることがあるとする（遠藤1997）。「居てあつた」は、いわば「エ（イ）ダッタ」の分析的な表現である。断を文章として書き控える際に復元意識が写本の筆者に働いて、このような表現を採るに至ったのではあるまいかと考えられる^[註10]。

F ヤレひんはりかほしいのかんさしかほしいの、(10ウ⑥)

語彙面を取り立てて「鬢張」を挙げてみる。婦人が鬢に張りを持たせるために内側に入れるものであるが、喜多川守貞『守貞漫稿』十一巻「女扮」の項を見ると、

京坂ニテ、ピンハリ、江戸ニテ、ピンサシと云。（東京堂出版・1992、2巻112頁）

とあって、鬢張は上方語での呼称であることが分かる。この1例をもって判断するわけにはいかないが、上方語と江戸語が語形的に対立する場合、上方語形を選択的に採り上げているところに関心がいく。このほか同書には、多くの俚言が収載されているが、松岡（2003）の報告に譲って、ここでは割愛したい。

むすびにかえて

小考において、後藤本『老の寐言』を採り上げ、使用言語を主として音韻・語法面から検討した。談義体の文章であり、文章語体を基調にしつつも諸処に口頭語性が現れており、そのことは聞き手を意識した箇所には断定辞ジャが頻出すること、口頭語に現れやすい二脱けや助辞イが観察されること、さらに複合動詞前項に促音が用いられている語が比較的多いこと、などに窺える。その口頭語的表現はさらに方言色にも濃厚に彩られ、接続する母音ことai・oiのイがエへと交替する例を多く持つことをはじめとして、チからツへの交替、カタ行有声化などの音韻面において諸事象の発現が認められる。また、異なる写本間において、音韻的事象も互いに食い違う現れ方をするという事実も判明した。これには写本成立の年代差や書写者の意識の相違が関わっていると考えられる。語法面においても当該方言に近い表現が看取されたが、用例自体は少ないと言わざるを得ない。

資料的に限りのある一時代の方言資料として、後藤本『老の寐言』は村山方言資料として一定の価値があるものと捉えられよう。ただし今回の調査において、写本間に音韻的事象の全く異なる現れ方があることも知った。可能な限り別の写本を探し出して比較検討を行う必要があると痛感するも、今後の課題としておきたい。

諸註

[註1] 後藤・阿部の解題によると、横尾本に「五詫先生著述書籍目録」と称して、以下のような噺の題目が記されているという。

- | | |
|-----------|---------|
| 一、柳物かたり | 一、かるた合戦 |
| 一、酒の諷誦文 | 一、道楽寺縁起 |
| 一、臍宝ノ論 | 一、ふくさの詩 |
| 一、金おろしの讀 | 一、捨犬の弁 |
| 一、袋の論 | 一、大淀ハカ伝 |
| 一、長崎亀か伝 | 一、菰庵ノ記 |
| 一、五詫先生ノ伝 | 一、手拭禪ノ論 |
| 一、蓮菰蕪の賦 | 一、ひかん談義 |
| 一、巾着二度ノ出世 | 一、にくまれ草 |

内容は別にして題目だけ通覧しても、ゴシック体で示した噺は、後藤本との共通性を持つことが推測される。また後藤本に05「五詫先生述 風流臍おどり談義」とあり、「五詫先生」との共通項からも、後藤本は横尾本系統ではないかと見られている。

[註2] 文末表現に着目して、同書に断定辞がどのように使われているか、併せて文中の用法のものをつき合わせて、以下付表に示す。噺ごとにまとめたが、表中脱けている噺には断定辞がとくに使われていなかったということの意味する。

	ナリ		ナ ナルカ ナシ・ 他	ジャ	デア アル		ダ	丁 寧 形	ナリ く					ジャ く		デア アル く		ダ く					
	ソ	ナリ			ナリケリ	デア アッタ			ダ ン ベ イ	デ ゴ ザ ル	デ ゴ ザ リ マ ス	ナ リ ト モ	ナ リ セ バ	ナ リ シ ガ	ナ レ ド (モ)	ナ レ バ	ナ リ ケ ル		ジャ ニ	ジャ ク 他 ヨ	デア ウ ツ タ ニ	ダ カ ラ	ダ ノ ノ ノ (並 立)
2	にくまれ草	16	2		7	1		2			1	2	5	12		3	6	1		3			
3	臍の一儀	3	5											1	4								
4	捨犬の辨		2								1												
5	風流臍おどり談義		1		8		2	4	1				2	1		2				1			
6	味噌あげ論	1	2	1	2								1										
7	大淀八か伝		2		1																		
10	酌子の銘			2																			
11	菰蕪の賦	1																					
12	はやり綿ぼうし	1	4	1																			
13	最上チャの辨		1	1			1																
14	無縁大豆		1											1									
15	團扇の讀														1								
16	長崎亀か伝		2								1				2								
18	風一代記	1	2	1									1										
20	敬申不自由文之事		3	1																			
21	しなび巾着		2	1										1									
22	袋の論		1										1	2									
23	浮木の亀		1			1		1							1		1			1			
	計	7	45	3	7	18	2	2	1	7	1	1	1	1	2	11	24	1	3	9	1	1	4

[註3] 同語は、『山形県方言辞典』（山形県方言辞典刊行会・1970）によれば、

オナがマ 巫女（みこ。占いをする女）。山形。東村千布。西村。北村。最上。（108頁）と説明され、村山・最上地方の方言語彙であることが知られる。「が」とかな書きされてい

るのは、同辞典では非鼻音の、いわゆる「中濁」（カタ行有声化音）を示すためである。語源が不明確ではあるが、これをもってカ行有声化の例としておく。ちなみに別の箇所において「おなかまに聞すハなるまい（49オ⑤）」「かのおなかまが呪ないを（51ウ⑥）」との清音表記例がある。

[註4] 近世期の節用集『合類節用集』ならびに『書言字考節用集』には「クハラ」との読みガナが添えてあるところに「掛絡」と宛書きされている（勉誠社『合類節用集研究並びに索引』および勉誠出版『改訂新版書言字考節用集研究並びに索引』参照）。中央語における規範意識では、当該語は合拗音を内包するものであったことが知られる。

[註5] 福島県北部地域の調査をもとにイ・エ混同の実態を究明した飯豊（1984）には、前後の母音の狭さ・広さに影響されて[i]や[e]が現れやすいという傾向があり、インフォーマントがイ・エの識別を持っていそうに見えても、実際には調査対象語の音環境に左右された結果にほかならない旨が述べられている。用例の音環境について十分に考慮しなければならないが、現段階では把握できていない。

[註6] 彦坂（2005）において、福島県中通地方にゆかりのある近世・幕末期の地方文献に現れる合拗音表記例を基に、近世期各地に残される合拗音の実態例と現方言分布とを対照的に分析したうえ、近世末期東北地方においても合拗音が保持されていた可能性が高いと論じられている。

[註7] 大正6（1917）年『口語法別記』の記述においても、『狂言記』や『醒睡笑』の例を挙げながら、「好」無」に、「そう」を添える時わ、間に、「さ」を入れる」とし、「よきそうに」「なきそうだ」を標準的な言い方として認めている（161～2頁）。

[註8] 抄物の例とは大いに隔世の感があるが、講義・談義を記録した文体としての流れを考える際に参考になると思われる。本書同時代における類例として、明治2（1917）年刊『安産仙翁邦言教諭』（宮城県図書館所蔵）にある例を示しておきたい。

ベシ・ベイの接続	語 例	出 例 箇 所
終止連体形＋ベシ	出すー	4ウ⑤
	思ふー	3ウ①・5ウ⑧・9ウ⑤・11ウ⑤
	語るー	13オ②
	気張るー	6オ③
	下すー	12ウ⑦・13オ③
	冷やすー	3オ⑨
	蒸かすー	4オ③・5オ①・7ウ⑤・9ウ⑥
未然連体形＋ベシ	食はせー	6オ⑧・9ウ①
	吸はせー	3オ③・3ウ⑤・10ウ④⑦・12オ⑦
	為させー	6オ③
	飲ませー	6オ⑤・7ウ⑥・9オ⑥
	用へ[用る]ー	3ウ⑥・9ウ⑤
	見分けー	5ウ⑥
終止連体形＋ベイ	だ[出]すべい	5ウ③
未然連体形＋ベイ	おせ[教え]べい	表紙見返①

うえのとおり、未然連用形に接く例は、一二段動詞の例であることが判る。同書は、妊婦・産婦に対する指南書であり、教示的な内容を持っているためか、全体として説教臭を帯びた文体である。幕末期仙南地域の地方語を反映した可能性を持つ資料として検討の価値がある。同書における特異な音韻表記例をめぐるのは、山本（2004）において述べたことがある。

[註9] 湯澤幸吉郎（1954）『増訂江戸言葉の研究』によれば、近世江戸語資料において、ベイは「下一段活用にはその未然形に付く」「上一段活用にも、その未然形に付く」（473頁）

という。前註に示した「おせべい」の例など、東部方言としての共通性を思わせる。ちなみに明治39（1906）年『口語法調査報告書』によれば、「受けべー」のような言い方が報ぜられる山形県内陸地域は米沢市・東置賜郡であり、山形市・西村山郡・北村山郡は「受け（ゲンベ）」、最上郡は「受くべー」とされる（第4條）。

[註10] 松岡（2003）において、アンケート調査項目に「いてあった（居たということ）」が掲げられており、山形市出身で村山市在住の50代女性がひとり理解語彙である旨を回答したようである（松岡2003では、昔は使っていたが今は使わない、もしくは聞いたことはあるが使ったことはないという語彙を理解語彙としてカテゴライズする）。インフォーマントは関東圏での在外歴もあり、またどういう場面や例文を想定して回答したものか判らず、調査結果に不確かさを覚える。それというのも、他の高齢層を含むインフォーマント4名一様に意味不明としているからである。贅言ながら、質問項目の立て方、聞き取りによる綿密な再調査という、調査方法そのものにもう工夫要るよう感じられる。他4名のインフォーマントの回答が常識的と思われ、おそらく「居てあった」は当時の村山方言に存した言い方ではなく、後藤本書写者が文章語に作るに当たり、念頭に存した前代的表現への指向性によって導かれた表現ではなかろうかと思われる。同語形の実例について、迫野（1996）には、東国系抄物である『大淵代抄』から以下の例が紹介されている。

物ヲソロシイ虎ガ……善覚禪師ノ左右ニ近ツイテ居テアツタ処ヲ（上246）
ただしこれは、純粋な存在表現ではなく、補助用言としての用例である。

参考引用文献

- 飯豊毅一（1984）「東北方言における「イ・エの混同」「シ・スの混同」」（明治書院『現代方言学の課題二 記述的研究篇』、1998『日本方言研究の課題』国書刊行会に収載）
- 遠藤仁・加藤正信・平澤洋一（1997）『山形県のことば』（平山輝男編・明治書院）
- 加藤正信（1975）「方言の音声とアクセント」（筑摩書房『方言と標準語－日本語方言学概説』）
- 神戸和昭（1990）「化政期江戸語に於ける合拗音クワ（グワ）－『浮世風呂』を資料として－」（『国語学研究』30）
- 後藤利雄・阿部浩一（1972）「後藤本「老の寝言」」（『山形方言』10）
- 迫野虔徳（1996）「日本語の東西方言差と「テイル」」（三省堂『言語学林1995-1996』、清文堂出版『文献方言史研究』1998に収載）
- 徳川正宗（1979）『日本の方言地図』（中公新書）
- 彦坂佳宣（2004）「近世末期『広八日記』の音韻表記－南奥方言資料の可能性－」（『立命館文学』583）
- 彦坂佳宣（2005）「東北人による『広八日記』『桑名日記』の合拗音表記－近世末期南奥地方の合拗音の残存可能性－」（ひつじ書房『日本近代語研究』4）
- 松岡明子（2003）「江戸時代資料からみる村山方言について－『老の寝言』を対象として－」（『山形方言』35）
- 山形県方言研究会（1972）『山形県方言概説』（栄文堂書店）
- 山本淳（2004）「宮城県図書館所蔵『安産仙翁邦言教諭』に見られる音韻現象」（『米沢国語国文』33）